

貪欲、瞋恚、愚癡より餓鬼、畜生をへて地獄に落、又中途にても信善をふれば、上段江進み、疑惡をふれば、次第に三惡道に落、如此算木の目、信疑善惡の差別にて、千變萬化して、誠におもしろく、他力安心稱名相ぞくの御縁とす、

寺町四條下ル 菊屋喜兵衛

〔名物六帖三 騷博奕三 選佛圖〕

〔嬉遊笑覽四 雜伎〕繪雙六は淨土雙六といふもの古し、望一千句、願ふこそ唯極樂の花の縁永きひねもす打繪すこ六、是は南閻浮洲よりふり出し、いづる目のよきあしきに依て、或は天堂に上り、あるは地獄に墮、その内永沈ネウチンとて、一度こゝに落ぬれば、出ることあたはず、故に永沈といふなり、これにて永沈雙六といふ、

〔還魂紙料上〕淨土雙六附治良雙六治良紋楊枝道中雙六、

繪雙六といふもの、漢土にはふるくよりあれども、本朝にはふるき書には見えす、淨土雙六といふものぞ、繪雙六のはじめなるべき、それさへいつの頃よりある歟、詳ならず、俳諧の發句には、萬治寛文中よりあり、假字草紙に見えたるは、貞享元年の印本、西鶴二代男に、吉原の遊女の遊びたはぶれて居ることをいふ條に、或は手相撲、火わたし、淨土雙六、心に罪なくうかれあそぶを云々、又初音草、大鑑元禄十一年印本に、九月の中頃、日待をせしに、明がたき夜のなぐさみとて、小歌、淨瑠璃物まねなど、さまざまなる中に人の心の善惡は、これで見ゆるものぢやと、淨土雙六をうちけるに、やうちんへおつるもあり、餓鬼道へゆくもあり、一人は佛になりたりとてよろこぶ云々、又今様廿四孝寶永六年印本、六の巻に、高下貧福世間は淨土雙六をうつが如し云々、又野傾旅、葛籠に、あの淨土雙六打て居る、色のあさ黒女の子云々といふことあり、又舞臺萬人鬘にも、淨土雙六を少年のうつ事を載たり、この二書は、刻梓の年號なし、推量おもふに、正徳年間の草紙にやあらん、なほちかく見えたるは、潜藏子享保十六年著、上元文五の巻に、此節弘誓の船にはのるべき人もなくて、廿五の